「日々の理科」（第 529 号） 2015（H27）,12,16

「常緑樹化するイチョウ（１）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

本校は大学構内にあり、その大学の正門から講堂にかけて、１４本のイチョウが植わっている。美しいイチョウ並木である。小学校はそのイチョウ並木の左側にある。そのイチョウに異変が起きている。

毎年６年生が、卒業アルバムのために、集合写真の撮影をするのだが、その時期が年年歳歳遅くなっている。かつては 11 月の中旬には美しく色づいて、撮影適期になったのだが、ここ 10 年ほどは、11 月中旬では、ほとんどのイチョウは夏の姿のままだ。一番美しくなるのは、ちょうど今の時期、つまり 12 月中旬から下旬なのだ。

「大学正門のイチョウ並木」　2015, 12, 15 撮影

上の写真は、昨日（12 月 15 日）に撮影したものだ。イチョウの黄葉はまさに見頃で、木によってはまだ緑色の葉をつけている。門の右側（守衛所）のそばにあるのはケヤキの大木だが、これもまだたくさんの葉を残している。とても 12 月中旬の風景には見えない。

イチョウは言うまでもなく落葉広葉樹である。落葉樹が秋に葉を落として、裸のまま冬越しをする理由はいくつか考えられる。間違いなく言えることは、「イチョウは、葉を落としたまま冬を越すほうが有利なように進化した。」ということだ。

落葉樹が秋に葉を落とす理由の一つが、「枝を雪の重さから守る」ことである。東北のブナの大木は、葉を落とし終る前に雪が降ってしまうと、葉にも雪が積もり、枝が折れてしまうことがあるという。太い枝を落とすと、最悪の場合、その樹は枯死するという。ブナにとっては、初雪よりも前に、すべての葉を落とせるか否かが、まさに死活問題なのだ。

「雪のイチョウ並木」　2013 年 1 月撮影　C. Tanaka

東京にも雪は降る。本学のイチョウ並木も、時々美しく雪化粧をする。しかし、それは一年にせいぜい１回か２回で、積もっても５cm 程度である。イチョウに葉があっても、たぶん耐えられるだろう。東京のイチョウは、本当に葉を落とす必要があるのだろうか？

「理科準備室から見たイチョウ」　まだまだ美しい。